

## 第2回 ふたりで紡いだ研究者の道



私と夫の履歴は、お互いを裏打ちしながら、喧嘩もしながら、紡いできました。

\*\*\*\*\*

ふたりは1年違いの高校の同窓生。

夫は先に理学部・物理学科に進み、卒業後は高校の理科の先生になりました。

そして、結婚。

その宣誓時に、わたしたち青二才たちは、

「お互いを尊重し、それぞれが自分の選んだ道を歩み、家での立場は平等とする」  
と高らかにうたいました。

\*\*\*\*\*

その頃、私が決めたのが**医学部への路線変更**です。

こうして、医学部に入学<sup>1)</sup>。入学金と授業料が最安で、両親の家にも近い大学を選びました。  
一年生からの再出発です。同級生は、最大6歳下の80余名。

ただし、私と同じ再出発組の仲間は数名いました。私は当然プータロー。  
生計は夫の給与とみの片翼飛行でした。でも、家での立場はほぼ平等でした。

そんな中、医学部2年生と3年生<sup>2)</sup>の時に妊娠。

妊婦で解剖実習とか色々な科目の追試も、この時に体験しました。

休学せずに出産までこぎつけたのはいいのですが、待っていたのは保育所探し。

とても高い壁でした。

1970年台後半の保育所の入所条件には、「**母親が大学生**」という規程は勿論なく、  
市役所でスッタモンダ・スッタモンダ・スッタモンダ……。

最後にはなんとか粘り勝ちし、子供は保育所に入所できて一件落着。

次の子は、すんなり兄と同じ保育所に入所できました。

「基礎配属」とそれに続く「研究インターンもどき」は2人の子連れ時代でのことです。

その頃、夫からも、やりたかった経済学に転身したいという希望が噴出。  
ということで、彼は夜間の経済学部で学士入学。  
昼間は高校の先生で、妻子持ちという、ほんまもんの苦学生になりました。  
続く経済学研究科の修士・博士課程は昼間のコースしかないため、夜間高校で教えることになりました。  
苦学生続く。

しかし、この「二足の草鞋」がさすがに辛くなり、高校の先生を辞職。  
二人してプータローになりました。  
**両翼無しの飛行！怖いですよ。**

ありがたいことに保育料が無料になり、  
預金の取り崩しと親からの援助でなんとか生活ができました。  
これが1年近く続きました。

\*\*\*\*\*

その後、運良く——「実力じゃ！」という遠吠えが微かに聞こえますが——  
夫の経済学部助手（テナトラック）、今の助教への就任が決まり生活は少しまともになりました。  
夫、33歳。

一方の私は、医師免許取得後も大学院に進み、大学病院でも無給で相変わらずのプータロー。  
大学での研究と時々バイト医師の生活が続きました。

### 大学院の3年生の時に3人目を出産。

7時から19時まで保育してくれる市があるとの耳寄りな情報を看護師さんから教えてもらい、  
その市に転居しました。

実際、私がそれまで住んでいた市では、保育業務は17時で終わりでした。  
転居したおかげか、母親が大学院生で定職を持たなくても、保育所はすんなり決まりました。  
学位取得後も同じ生活パターンで、私は不安定な日々でした。

そして、そのまま、家族全員での米国留学に突入。米国留学中に4人目を出産しました。

\*\*\*\*\*

注釈

- 1) [第1話参照](#)。なお、当時、医学部の学士入学はありませんでした。
- 2) 当時の医学部のカリキュラムは、1・2年生で英語や運動などの教養教育、3・4年生で基礎医学教育、5・6年生で臨床医学教育でした。のんびりしていました。

